

宇田川玄随の没後、その跡を継いだのは養子の宇田川玄真（榛斎）です。今回は、若き日の玄真が初めて玄随に出会った時のエピソードを紹介することにしましょう。

玄真は旧姓を安岡といい、明和6年（1769）、伊勢国（今の三重県）で生まれています。

若くして漢方医を志した彼は、漢方医学の古典『傷寒論』に自分なりの解説を加えたものを携え、江戸に出て名医を訪ね歩いていました。

二人の初めての出会いは、当時、津山藩江戸屋敷で西洋内科書の翻訳に取り組んでいた玄随を22歳の玄真が訪ねたことに始まります。

玄真がいつものように持参した『傷寒論』を差し出すと、玄随は書名と最初の数枚を開いただけで見るのをやめてしまいます。不愉快に思った玄真が「私が若いと見て、軽んじておられるのですか」と詰め寄ると、玄随は「傷寒論は既に読み尽くした。今の私には不要だ」と言います。納得がいかない「では、治療はどの本を頼れば良いのですか」と問い返すと、玄随は「五臓六腑（内臓のこと）にはそれぞれの働きがあり、それを知らなければ病気の原因も分からず、一体どうやって薬を与えるのか」と言って、西洋医学の説を熱く語り始めました。

しばらくは耳を傾けていた玄真ですが、プライドを傷付けられたことにいたたまれなかったのか、突然立ち上がると外へ飛び出してしまいます。しかし、冷静になってよくよく考えてみれば、玄随が言うことにも一理あります。そこで『傷寒論』を破り捨て、取って返して玄随に入門することを

洋学博覧漫筆

～玄随と玄真の出会い～

決意したのでした。

それからしばらく、宇田川門下生として漢学や蘭学の基礎について学んでいた玄真でしたが、玄随が参勤交代のお供で江戸を離れることになってしまいます。そこで、その才能を見抜いた玄随の勧めにより、蘭学の大家として知られる大槻玄沢や桂川甫周の屋敷にも出入りするようになります。ちょうどその頃、年老いて生まれた実子の後見役を迎えたいと考えていた杉田玄白は、玄沢らの推挙もあって、玄真と父子になることを約束したのでした。

玄随との出会いからわずか数年で、蘭学界の大御所杉田玄白の養子になるという幸運をつかんだ玄真。やがては宇田川家を継ぐことになるのですが、その成り行きについては次回に触れたいと思います。



▲宇田川玄真肖像画
(武田科学振興財団所蔵)

※透かしの家紋は右が眞作家、左が宇田川家のもの

8月中のひとの動き

人口	109,795人	(前月比△19)
男	52,336人	(同+7)
女	57,459人	(同△26)
世帯	43,799世帯	(同+6)
転入	234人	転出 243人
出生	84人	死亡 94人

(9月1日現在)

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください



つ・ぶ・や・き

編集室

祭りが近づくに食べたくなるもの、それは「ごぼすし」。甘酢に浸した日本海の塩サバのうまみがすし飯になじんで生まれるおいしい味。家々で微妙に違う味。このごぼすし、誰の手作りに？と聞くと「お店の人...」。

特集で紹介した「津山まつり」。昨年は徳守神社の大神輿に付いて取材しました。200人近い男衆が交代で担ぎ、勇壮に練り歩く姿は圧巻。幻想的な大隅神社の「宵祭り」もおすすめです。皆さんもぜひお出掛けください。(S)



高校生でゴルフ。しかも強いときた。みんな、父親の打ちっぱなしについて行ったのが始めたきっかけのようだ。我が家の子どもたちも、1人で遊びに行こうとする父親に煙たがられながらついて行ってるけど...、ね。(和)



つやま 広報

10月号
平成20年
2008
648号

編集・発行 (毎月10日発行)
津山市総合企画部市長公室 (市役所3階)
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

